



斎藤

澪 みお

この子の七つのお祝いに



昭和五十六年五月二十日 初版発行
昭和五十六年六月二十五日 三版発行

著者 斎藤 澪^{みづ}

発行者 角川春樹

この子の七つのお祝いに

発行者株式会社角川書店

〒102 東京都千代田区富士見二一十三―三

電話東京(〇三)二六五―七二二(大代表)

振替東京三一 一九五二〇八

新興印刷・宮田製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0093—872307—0946(0)

目次

第一章

五

第二章

三

第三章

三

第四章

七

第五章

一〇

第六章

一三

第七章

二〇

終章

二四

受賞の言葉

二九

選評

二七〇

裝丁
福田隆義

この子の七つのお祝いに

第一章

どうして冬の夜明けは、湿った蒲団ふとんの臭においをするのだろう。

母の、饅まんえた体臭。ひび割れた肌はだにいつも滲にんでいる汗と涙の腐臭。怨讐おんしゅうの言葉ことばを吐はき散らすときの口臭。——それらがなймаざった母の屍臭ししゅうを、私は嗅かぐ。

鉛色の、冬の雲のように冷たい蒲団ふとんは、夜の寒気がしみついて、まるで黒い凍土だ。そこにポツリと、朱の一点がしたり、朱はぼろ蒲団ふとんに吸われて、たちまち消える。だが、朱は執拗しつごうにしたり、やがて繊維の一本、一本を染めあげ、蒲団ふとんをまっ赤かに染めつくす。

雲も一面、赤黒い血の色だ。——冬の夜明けだ。

風が鳴る。裸木はだかぎが、風にこすれて震えて哭なく。その声は、かわいそうな母の泣き声。

どうして幼い頃こころの私の記憶は、こんなにはっきりしているのだろう。だけどその記憶は、ストロボライトで闇やみから切り取ったように切れぎれだ。

闇やみの澱よどんだあの部屋。板戸いたどの隙間すきまから射さす光を、私は手のひらに採とろうと夢中だ。突然、母の腕かみが躍

り、母が私を抱き上げる。母の手が、板窓を木の棒で押し上げる。押し寄せる光の帯——そのまぶしさに驚いて、私は母の胸に顔を埋めた。母は私をゆすり上げ、

「ほら、おそとは春よ」

と、うたうようにいう。私はおそるおそる目を開ける。川の向こうに広がる小石の原っぱ。走りまわる子供たち。大人の影も見える。その向こうに建ち並ぶ家々のガラス窓の反射。空はあたためたミルクのようだ。

私の腕をチロチロと舐めた春の陽。スカートの下から舞い込んで素肌をかすめた風の感触。いつの間にか、私は川原に立っている。そして両手に溢れるほどの黄色い花。

どうしてこの色は、こんなにも鮮やかに記憶にあるのか。私の心も踊っていたようだ。だが、私のそばに母の影はない。そういえば、あの部屋から私を外に連れ出したのは、一体誰だったのか……。

母はいつも病んでいた。もともとひ弱かった母の身体は、出産という重荷に耐えるだけの力はなかった。それなのに私を生んだ。だから、私の記憶の中では、母はいつも伏せてばかりいる。——でも一度だけ、外から帰る姿がある。

隙間だらけの板戸に目を押しあてると、部屋の向こうは長い廊下がつづいていて、廊下の突きあたりには小さなガラス窓があり、そこから射し込む光が、鉛色の陽の池をつくっていた。時たま、両側の戸から現われる大きな人影。——あれは木賃のアパートであったのか。

その時、母は廊下のはずれの壁をすり抜けてきたように、ゆっくり姿を現わした。そしてまっすぐこちらを向く。母は肩で壁をつたうようにして歩いてくる。両手を胸のあたりで組んでいる。そして、そ

の手と胸の間には紙包みが詰まっていた。

母は板戸の隙間から覗いている私の目をみつめて頬笑む。その紅い唇、透けるような肌。身体に纏わりついた、腰までとどく黒い髪。私は美しい母をぼんやりと眺めていた。

母が抱えて帰った紙包みから、色彩がこぼれ落ちた。多分、果物とか下着の類だったろう。覚えているのはバナナとチョコレートだ。

いつ頃からか、母の着物や帯などがあの紙包みに変わっていくのは、幼いなりにわかっていたように思う。それとも、その鮮やかな色彩の記憶に、私がかつてに物語を作ってしまったのだろうか。

いや、そうではなかった。隣の部屋にいた女の人だ。あのお姉さんが品物をいつも売ってくれていたのだ。

とすると、あの日にかぎって、母は自分で出かけたのだろうか？

……そう、思い出す……いろいろなことを――。

珍しく美しく粧った母を見上げて、

「どこへ行くの？」

と、私がきくと、

「お土産をいっぱい買ってくるから、おとなしくしてるのよ」

といって、母は出かけた。だから私は、戸の隙間からたびたび外を覗いては、母の帰りを待っていたのだ。が、母は何を売って、あの品物を買ってきたのか……。出かける時の母の持ち物にはまったく記憶がない。

そういえば、私はその後も何度となく、バナナやチョコレートを食べている。これらが当時、いくら

したのか私は知らない。だが私たちの貧しい暮らしに不釣合なのは確かだ。こうした買物は、母の唯一の贅沢だったのだろうか。しかし母は自分は決して食べず、いつも私の手に握らせてくれたものだった。そうした日の後、母はきまって二、三日、熱を出して寝込んだ。そんな時、私は母の顔や胸の汗を拭き取った。母はかすれた声で、

「ありがとう、いい気持よ」

と呟いた。

母は一冊のアルバムを持っていた。女学校を卒業した日に、母の両親が贈ってくれたものだった。黒のスエードを貼った表紙の、そのなめらかな手ざわりが好きで、外に出してもらえない私は日がな一日、それで一人遊びした。私が舐めた涎のあと。そして母の涙のしみあとには白いカビが生え、いま、指で触れると、三十年前の涙が床に散り落ちる。

このアルバムが、母の手もとに残ったただ一つの貴重品であった。それはまた、母の過去の断章でもあった。私は、幼い私の手にあまるほど厚く大きいアルバムを抱えて、母の寢床で腹這いになる。二人のおしゃべりはいつもアルバムの中からはじまった。

髻を結った晴着姿の母。洋装のモダンな母。袴姿に革靴、白い大きなリボンをつけた女学生時代。級友と並んだ卒業記念写真。どの顔もふっくらしていて、輝いているようだ。

軍服の父と並んだ支那服姿の母。これが結婚記念の写真だ。戦時中、母は中国の北京にいたので、結婚式で着られるようないい服はこれしかなかったからと母はいったが、この時の母が、一番美しい。

二人の愛の記念であるはずのこの写真。しかし、母のわきに立っている父の姿だけ何か所かちぎれた

あとが残っている。うまく貼り合わせてはあるが、破いたのも、貼り直したのも母であらう。父の存在を葬り去ろうとした母のいたましさ。そしてまた、もう一度貼り合わせた母のあわれな心が、いまの私には痛いほどによくわかる。

だが、破き、貼り直したあとの亀裂は、父の顔の下顎から口もとにまで拡がっている。だから父の顔は歪んで見える。しかも父の眼もとは何か所か鋭い刃物で突き崩したようなあとがあつて、その口もとと目尻の皺の感じから、私にはそれが笑顔だと忍ばれるばかりだ。「おとうさんは、それはきれいな、やさしい目をしていたわ」と、母は遠くをみつめながらいったことがある。父に対する母の噴き出るような激しい憎しみと、愛——。かわいそうな母。

だが、この一枚の写真には、まぎれもなく幸せな二人が写っている。ごてごてと飾りのついた椅子に腰かけ、ほんの少し父にもたれてゐる母の笑顔。そして母のわきに立っている父は、身体をやや傾げ、右手は脇の下にまっすぐ伸ばしているが、左手は、母の首筋に置かれている。写真の母の笑顔をみつめていると、父の左手指は母の黒髪の中で、白い襟足をいとおしんでいるとしか思えない。

そうした二人の幸せも、それほど長くはつづかなかつたと、母はいつた。それでも、アルバムの最後に飾られた一葉の写真を見ると、私はほっとする。それは、生まれて二、三か月ほどの嬰兒を抱いた母の姿だ。よだれ掛けしか着けていない裸の赤ん坊は、顔も手も丸々と太っている。そして赤ん坊を抱いた母の顔も、卒業写真の顔と同じようにふっくらとして明るい。

——あなたが生まれた時、おとうさんは大喜びで大変だったの。生まれたばかりのあなたを写真に撮るんだといって、あちこち探したんだけど、誰も写真機なんか持っていないくて、それでも何か記念に残したいといって、それであなたの手型をアルバムに残すことになったの。そして、どうせなら三人一緒

に並べた方がいかにもお祝いらしいということになって、おとうさんもおかあさんも、こうして手型を押したの。ネ、おとうさんの手をみてごらん、大きいでしょう。この手がいつもおかあさんとあなたを、可愛い、可愛いって撫でてくれたのよ。かわい、かわいって……。

アルバムの一ページを覆い隠すほど拡がった父の掌。そして隣のページには父のたなごころに触れるようにして、母の掌が寄り添っている。父の掌と較べて、母の掌はあまりにもか細い。

そして二人の掌の中央で、私の掌が踊っている。むずかったのか、私の掌はところどころかすれている。それだけに、私はまるで両親の愛に包まれて、ころころ笑いころけているようにみえる。

私が生まれた当座は、父と母の生活に暗い翳などはなかったのか。いや、私の出生は二人に喜ばれたのだと、私は信じた。

だが、母の楽しい思い出話はいつもここで終った。そして突然、やさしい父はあとかたもなく消えて、母のすすり泣きはじまると、二人を捨てた冷酷非情な父の姿が現われる。

——おとうさんは、他の女の人が好きになったの。それで、おかあさんのお金だとか宝石をみんな持ち出して、その女の人と暮らしはじめたの。だからおうちには、お米を買うお金がないでしょ。みんなおとうさんが、その女の人にあげちゃったからよ。お腹がすいたでしょ。寒いでしょ。でも、なんにも買えないの。みんなおとうさんが持っていっちゃったからよ。悪いおとうさんでしょう。だからマーちゃんが大きくなったら、おかあさんと二人でおとうさんに復讐してやりましょうね。おとうさんをウンといじめてやろうね。ネ、二人の約束よ。

母と並んで横になり、母のおしゃべりを聞いているうちに、いつしか私は眠りにつく。うつらうつらした耳に、母が繰り返す吹き込む怨みの言葉は、知らず知らずのうちに幼い私の胸に刻み込まれた。だ

が、聞き馴れた「復讐」というおとぎ話は、私の子守り唄でもあった。その「復讐」の子守り唄を聞きながら、私は母との楽しい約束の果たされる日を夢みていた。

おしゃべりに疲れると、母は目を閉じたまま小さな声で歌をうたってくれた。歌はきまって「とおりやんせ」であった。

とおりやんせ とおりやんせ

ここはどここのほそ道じゃ

天神さまのほそ道じゃ

ちいっとおしてくだしやんせ

母の声に合わせて私もうたう。うたいながら、母の袂をしっかり握り、私は母とこうして手を結び合わせて、決して父を通さないのだと、幼い心に誓っていた。

母は、昭和二十九年の、新春を迎えたその元日の朝に息を引きとった。だから毎年、私は大晦日になると、一人、夜明けを待ちながら母を想う。正月の華やいだ気分など、私には無縁である。私は母のこだけを覚えて過ごす。

私に遺された母の形見は、すり切れたアルバムと、母の遺書だけ。これらを一枚一枚繰りながら、私は母の想い出を、また一枚ずつ脳裏に刻む。

『可愛い麻矢。私の麻矢。』

あなたがこの手紙を読んで、どれほど傷つくか、それを考えると、私は書きすすめるのが辛い。

でも、私は、生きているうちに、一度だけ、誰かに、私の悩みを聞いてもらいたかった。私が負わされた惨めな生活を、愚痴を、誰かに話してみたかった。そして私が、ほんとうに心をひらくことのできる人は、麻矢、あなただけなのです。だから、これを書くおかあさんを許してちょうだい。私がなにを書こうと、どうかおかあさんを恨まないで。私にはあなたしかいないのだから。』

便箋に鉛筆でしたためたその遺書は、二十数年経つうちに紙は黄ばみ、文字は掠れた。母の落とした涙のしみ跡。その跡を慕って、私の涙のしみもある。母の泣き声を、私はすっかり誦んじている。だが、母のぬくもりが恋しくて、私は涙でくもった目の前に、またしても遺書を開く。

私をはじめて母の遺書を読んだのは、高校一年の時だった。

母の死後、私を引き取ってくれたのが、隣の部屋にいたお姉さんである。私はお姉さんの田舎に連れて行かれ、そこから小学校へ通うことになった。

縁もゆかりもない私を、お姉さんはなぜ育ててくれたのか？

そのいきさつを知ったのは、私が高校に入学した年だった。母は死ぬ時、お姉さんに手紙を残した。私を育ててくれと、母は頼んだ。隣人のよしみで私を可愛がってくれたという、ただそれだけの理由で……。

もう一つ、母は、私が大きくなったら、この遺書を渡してほしいと、お姉さんに頼んであった。

『麻矢、覚えていますか、おかあさんとの約束を。』

でも、あなたが大きくなって、おかあさんがなぜこうも、おとうさんを憎んだかなどと、批評がましいことをいうようになったらと思うと、私はこわい。私はそれがおそろしい。私が話してあげたことを、

あなたがすっかり忘れてしまっていたりしたら、私はあなたをも怨みます。

麻矢、お願いします。どうか、おかあさんとの約束は、絶対忘れないでくださいね。』

瘦せた肩を震わせて、母が泣き泣き語った父のむごい仕打ちを、どうして忘れることができよう。お金もなく、かといって働くこともできない母を置き捨てて、他の女のもとへ走った父だ。

『あなたが生まれる二年も前から、おとうさんは他の女と暮らしていました。』

そして月に一度か二度、姿を見せたかと思うと、黙って金目のものを持ち出すのです。売り食いだけで生きていた私にとって、たとえ着物一枚、帯一本でも残しておきたい。でも私には、起き上がっておとうさんを引き止めるだけの力さえありません。獣のように狂っているあの人を見て、非力な私はただただ怯えるばかりでした。

私にできる精一杯の抵抗——それは熱でうるんだ目を見開いて、おとうさんを侮蔑する、それだけでした。』

便箋で、四十枚以上もあるこの遺書を、母はいつ書いたのだろう。私が寝入ったあと、ひとり、薄暗い灯の下で、書き綴ったのであろうか。涙をおさえ、切々と語りかけてくるこの怨みの言葉のつらなり。私には母のすすり泣く声がかきこえる。そういえば、母にはおしゃべりする相手さえいなかった。母には、私しかないなかった。

母の苦しみは話すことで和らぎ、話すことで深まる。母の苦しみが子供相手のおしゃべりでどれほど和らいだのか、私にはわからない。しかし私は、とめない母のおしゃべりに、必死で相槌を打っていた。時には、強くなったり光を失ったりする母の眼が、恐いこともあった。でも私は、父を呪う母の怨みの言葉を一つ残らず頭に刻みつけた。幼な児が物の名前を覚えていくように、私は脳の裏の一筋ごと

に、父への憎しみを刻みつけてきた。

『あなたが生まれる前の年の、あれは九月でした。あの人はふらりとやって来たかと思うと、どういうわけか十日ばかり泊ってゆきました。その理由を知ったのは二ヶ月ほど経って、次にあの人が姿をみせた時でした。』

あの人はこういいました。「あいつ、俺の子を、とうとう生んだんだ……」

その時の私の驚きを、どういえばあなたはわかってくれるでしょうか。もちろん、私はずっと以前から、おとうさんを憎みきっていた。もう愛のかけらさえ私の心には残っていないと思っていた。それでも、他の女に子供ができたと言った時には、胸の内がどろどろと煮えたぎるような気がしました。

しかもあのひとでなしの男は、女と生まれた子供と三人で暮らしたいから、別れてくれというのです。病気の私を見捨てて、自分だけ幸せを掴むことで、頭がいっぱい、私のことなど考えるゆとりもないのです。身勝手な、無責任で、自分さえよければいいというのがあの人だった。あなたのおとうさんはそういう人でした。でも、そのあと私は、どうすればいいの？ 無一文で、病気の私は、働くこともできないのに、これからどう生きてゆけばいいの？

死んでやる！ その時、私はほんとうにそう思いました。もし魂というものが自由に歩きまわれるものならば、死んで、あの人が暮らしている家に行ってみたい、そして、幸せそうに暮らしている三人を、呪って、恨んで、私があの人たちから味あわされた苦しみを、骨の髄まで思い知らせてやろうと思った。私だけが不幸を背負わされるなんて、どうしても私には許せなかったのです。』

この時の懊惱を、母は地獄の苦しみだったと書いている。だが母の地獄は、ほんとうはここからはじまったのだ。